

研究ノート

幼稚園・保育園と小学校連携の課題

古川 鉄治 (白百合女子大学)

Tetsuji Hurukawa (Shirayuri University)

今、小学校において6年間の子どもの成長と入学および卒業する子どもの校種間のつながりが課題になっている。入学してくる1年生の子どもたちが、小学校の生活や教育にスムーズに適應することができるためにはどのようにしていくべきか。また、卒業する6年生の子どもたちが、学級担任制の小学校から教科担任制の教育や部活動などが盛んな中学校へどう不安なく、不登校という課題を乗り越えて中学校生活に適應していくことができるかが課題となっている。

ここでは、幼稚園や保育園から小学校へ入学してくる1年生には、どのような課題があり、浮かび上がる課題に対して、どのように小学校が手だてを講じ、幼稚園や保育園と連携していけばいいかを考えていきたい。

1. 最近の1年生の子どもの実態

今、小学校へ入学してくる子どもたちのほとんどが、幼稚園や保育園の生活を経験して小学校へ入学してくる。入学前の一定期間、幼稚園や保育園では、小学校への学校生活に馴染みやすいように子どもたちに何らかの事前の指導などをして、子どもたちが小学校の学校生活に適應できるように取り組んでいる。もちろん、それまで子どもたちは幼稚園や保育園のいろいろな生活場面を通して、自分たちが主体的に同年齢の友だちとの気持ちのよい関わり方を学ぶようにするとともに、年長者として年下の子どもたちの世話をする指導などを受けてきている。また、子どもたちが、集団での生活を送る上で、基本的な生活習慣を身につけ、個々のよさや特徴を發揮できるように学習や遊びなど様々な活動を通して成長してきている。しかし、最近学校生活や学校での学習活動をする上で、次のような子どもたちの行動や様子が見受けられ、学級運営や学習指導上で課題となっている。

- 教師の指導や指示に従うことがなかなかできず、授業中に席を立ったり歩き回り、学級の生活規律を乱す。
- しっかりと話が聞けず、じっと席に着けず、すぐ隣の子どもなどに手を出してしまう。
- 30人の学級を指導している先生に「僕だけ私だけの先生」を求めてくる。
- 生活体験の不足から、身につけるべき豊かな人間関係の認識と調整能力が未発達のまま成長し、入学後学校生活で支障をきたしている。
- 友だちとかかわって遊ぶなどの場での経験が少ないため、「仲間遊び」が苦手のまま、なかなか友だちと仲良く上手に遊ぶことができない。
- 自分の気持ちを他者や事物との間でうまく調整できないので乱暴な態度をとってしまう。
- 外界からの刺激をさけて生活している母子癒着の進行がみられる。
- 4月生まれと3月生まれの子どもの成長の差が、小学校へ入学時、活動の準備や片付け、理解力に時間差が生まれ、学習活動や生活面で課題となる。
- 基本的な生活習慣などがしっかり身についている子どもと、そうでない子どもの差がはっきりしている。
- 小学校の教科指導と幼稚園などの指導内容に違いがあり、学習活動にスムーズに適應できずにいる子どもが

見受けられる。

2. 幼稚園・保育園と小学校教育連携の課題と取り組み

1で小学校に入学してくる1年生の課題のいくつかをあげてきたが、幼稚園や保育園から小学校への入学後に、どのようなことを実際に小学校で取り組んでおけば、子どもたちが不安なく気持ちよく入学し、抵抗なく学校生活に馴染むことができるかを考えていきたい。このことは、小学校だけの取り組みでなく、幼稚園や保育園の協力を得ながら進めていくことが必要と考える。

① 考えられる課題

- 園児は、この時期何が不安で、どんな活動を組むことにより効果的な活動をここで設定すればいいか。
- 連携活動を組むに当たって、幼稚園や保育園はどんな入学前の指導を必要とし、小学校はどんな準備や子どもたちへの指導をすればいいか。
- 幼保小の交流活動を組むに当たっては、いつ、どんな内容で、どのように活動を設定することが効果的なのだろうか。
- そのために、事前にどのようなことをどのような形でどのようなことを連絡調整し、それぞれがどんな準備をしていくことが必要なのだろうか。
- 幼稚園・保育園も小学校との取り組みおよび実施に向けて、お互いがどのような無理のない設定を考え、持続可能で効果的な活動を組むにはどのようにすればいいか。
- 今、幼稚園・保育園、小学校がそれぞれの抱える課題への対応や日々の指導が忙しすぎ、心も時間にもゆとりがない。やりたいことやすべきことはわかっているが、なかなか現実としては手が回らない状態をどうするか。
- 交流連携だけが活動ではなく、子どもの学びや発達をそれぞれの教育機関がしっかり理解するとともに、それぞれの教育機関が独自の取り組みをしていくことも子どもの成長にとって大切な取り組みではないかと考える。
- まずは何を言っても、幼稚園や保育園の園長、そして小学校の校長がまず連携の趣旨と必要性をしっかりと理解し、学校や幼稚園や保育園が必要な取り組みや行動をとる必要がある。

② 具体的な取り組み

- 子ども目線で考えていくために、教師同士の幼稚園や保育園、小学校の学習活動の相互参観、教師同士の自由な場でのディスカッションなどを設定し、個々の子どもへどのような対応などそれぞれがどのようにしているかを理解し合い、双方で何をどのようにやっておくことが子どもの成長の上で効果的なことを明らかにする。
- 子どもの心や精神的な成長を双方の先生方が学習し、小学校の生活科を中心にただ交流活動をやっておけばいいという発想ではなく、幼保小9年間の成長を見据えた中での教育を考え、もう一度学校の教育活動のどこで何をやるのが効果的なのかを考える。
- 幼保園での幼児教育で学び育った子どもたちにとって、小学校教育の諸相がどう映るかを考えどういったことに留意をしていけばいいかを考える。
- 「子ども園」の国の施策の動きがある中、どのように就学前の子どもたちが新たに設置される機関で学び育っていくのかを学ばいい機会であり、課題と取り組みについて考えておく必要がある。
- 小学校の低学年のカリキュラム作りで、どのような各教科の合科的・関連的な指導を進めていく必要があるかを考える。
- 幼稚園や保育園の生活や学習と小学校の生活や学習に、子どもたちが、「学習の内容」「学習の場」「学習の時間」などに違いを感じているかを明らかにする。

- 小学校に入学する1ヶ月を適応期間としてとらえ、どのような学級体制、指導体制を組めばいいか、またカリキュラムや教科構成をしていけばいいかを考える。

今、幼稚園・保育園、小学校が連携するために、課題は何か、必要なことは何かを考えてきた。間もなく新しい学習指導要領が告示され、ここで幼稚園・保育園と小学校の連携のあり方や交流活動のねらいをもう一度再認識し、どのような取り組みをしていくことが入学してくる1年生にとってふさわしいのかを考える必要がある。また、「カリキュラム構成上の課題として、生活科を中心としてやっているが、他の教科や領域では考えられないか。」、いつも言われることだが、「双方の教育機関の指導内容や保育内容をよく研修や教師間の交流の場で理解し、子どもの成長や学びの連続の上で何をしていくことが大切か。」「小学校の教室を学校環境を子どもが安心して活動できる居場所にするために、幼稚園や保育園の環境整備を学び、小学校で取り入れることが出来るところを見つける。」「小学校は、連携活動時期を入学前（1月～3月）、入学後（4月～7月）に分けて考え、幼稚園や保育園は入学する上でどんなことをどのような活動および指導していくことにより、子どもが安心して小学校へ入学できるのか。」などを具体的な取り組みを想定しつつ、再検討してみる必要があるのではないかと考える。